

有馬節から見る有馬の文化

樽井 由紀（奈良女子大学）

柳田國男は『民謡観書』（柳田國男全集 18、ちくま文庫 1990）の中で民謡を「作者のない歌、搜しても作者のわかるはずのない歌」と定義し、「民謡の起源と変化を学ぼうとするには、（中略）知らぬ間に推移した生活習慣の足取りを跡づけて行く必要が毎度ある」と述べている。兵庫県の有馬温泉には江戸時代から有馬節（以下、有馬ぶしと表記）が何種類も伝わり、元禄 12 年版（1699）を最初に有馬ぶし歌謡を集めた版本が 8 版出版された。文政 10 年刊の『有馬滑稽紀行』（板坂耀子編『江戸温泉紀行』所収、平凡社 1987）には有馬温泉の宴会で湯女が有馬ぶしを歌い踊る様子が描かれ、歌川国貞（初代）の「摂州有馬湯女」（文政年間の中頃か）にも有馬ぶしが記されている。そして現在も有馬ぶしは有馬温泉で年頭に行われる入初式で歌われ、芸妓による座敷での接遇時にも欠かせない歌となっている。本発表では有馬温泉に伝わる有馬ぶしから有馬温泉の社会、有馬の文化を探ることを目的とする。

有馬ぶしの初出は元禄 12 年の『はやり歌古今集』に「松になりたや有馬の松に藤にまかれて寝とごゝ 寝と御座る まかれて藤に 藤にまかアれて 寝と御座る 情け有馬の花のゑん」とされている（小沢清躬『有馬温泉史話』五典書院 1938）。有馬温泉の湯女、藤を歌ったものであるが、有馬の湯女は坊と呼ばれる宿に属する女性で、代々同じ名前を受け継いでいるため、藤が誰であるか特定することはできない。この歌は江戸時代の一世を風靡した一大流行歌であったという（小野恭靖「有馬節と版本「ありまぶし」」『大阪教育大学紀要』第 I 部門 第 46 卷 1998）。

上記バージョンの有馬ぶしの結句「情け有馬の花のゑん」がその後、江戸の端唄、「松づくし」に「なさけ有馬の松がへに」と替えて取り込まれたように（倉田喜弘『江戸端唄集』岩波文庫 2018）、有馬ぶしは、有馬で長く逗留する湯治客たちによって元歌とは異なる要素が取り入れられた替歌が作られた。「今まで伝承されてきた民謡の歌詞は、ほとんどが替歌で（中略）時代の流れとともにたえず変化していく」（有馬敵『時代を生きる替歌・考』人文書院 2003 年）ように、有馬ぶしも時代の流れとともに変化してきた。そこで本発表では、河本正義編『有馬ぶし』（1935 年）および『有馬温泉史話』（1938 年）に集められた歌から有馬温泉の社会や文化について考えたいと思う。冒頭に掲げた柳田の言葉に即していえば、「作者のない歌」の変化から「生活習慣の足取り」を読み取る作業を試みることになる。



有馬ぶしを唄い、舞う湯女
『滑稽有馬紀行』文政 10（1827）